

# ある能楽ワークショップに携わった 日本語教師の気づき

——甲南大学「文化の継承と日本語教育」プロジェクトに参加して——

永 須 実 香

【キーワード】 能楽、伝統文化、ワークショップ、日本語教師、日本語教育

## 1. はじめに

本稿は、2018～2019年に行われた甲南大学総合研究所研究チーム「文化の継承と日本語教育」プロジェクトのうち、能楽ワークショップ(2018年9月8日、2019年10月19日)の実践から得られた知見とそれに基づいた考察を報告、共有するものである。2回のワークショップの概略を表1に示す。本稿では、便宜上、このワークショップを甲南能楽WS(2018)、甲南能楽WS(2019)と呼ぶ。

本稿中、甲南能楽WS(2018)、甲南能楽WS(2019)で、講師を担当した能楽師、上田宜照氏(以下、上田氏)のことばを引用する。それらは、甲南能楽WS(2018)のための打ち合わせ、甲南能楽WS(2018)当日の講義、ワークショップを振り返るために実施したインタビューを録音し、筆者が文字化、資料にしたものである。詳細を表2に示す。

表1 甲南能楽WSのスケジュール

	2018年	2019年
日時	9月8日(土) 13:00~16:00	10月8日(土) 13:00~16:00
場所	甲南大学 iCommons 能楽・歌舞伎練習場	西宮市:瓦照苑
講師	上田宜照(補助:寺澤拓海)	上田宜照
参加人数	日本語教師7、日本人学部学生1、 その他1(マスコミ関係者)	留学生5 日本語教師7、日本人大学院生1

表2 本稿中で引用する能楽師、上田宜照氏のことばの出典

	資料①	資料②	資料③
日時	2018年6月25日	2018年9月8日	2020年9月6日
目的	初打ち合わせ	甲南能楽WS講義	振り返りインタビュー
場所	甲南大学	甲南大学	上智大学
録音時間	3時間42分	1時間	1時間30分
文字数	約14500字(抜粋)	約11500字	約23500字

さて、本論に入る前に、まず、本稿の視点と問題全体をとらえる枠組みを明らかにしておきたい。

西林ほか(2017)は、日本の学校の教科教育を視野に、教師と教える内容との関係の問題が、これまで議論されてこなかったという問題を指摘し、「欠落しているのは、授業の場に臨む人たち、特にその授業に臨む個々の教師が持っている知識のあり方に関する関心であり、それを教授学習過程研究に取り込もうとすること」であると述べた。さらに西林ほか(2017)は、このような問題点を今後改善していくためには、「『トップダウン的実践研究』では役に立たない。特定の学習者に対し、特定の授業者が、特定の知識内容についておこなう特定の教授過程と特定の学習過程から出発する『ボトムアップ的実践研究』が必要だ」と結論づけている。西林ほか(2017)が対象にしているのは、文部

科学省という統率機関によって、教える内容がある程度統一され、明示されている学校の教科教育である。日本語教育の現場は、それとは、比べ物にならないほど可変要素が多く、学習者によって、環境によって、教える内容、ゴール設定、すべてを変えていかねばならず、心理的な問題はずっと大きいと考えられる。しかし、だからこそ、少ない経験値を拾い集めて共有していくような作業過程が、重要と言えるのではないか。そのように考えて、日本語教師についても、同じ枠組みで考え、日本の伝統文化を扱う日本語教師の事例報告をしてみたい。

本稿は、甲南能楽WS（2018・2019）に管理者として携わり、参加もした一人の日本語教師としての、筆者の気づきを報告するものである。その気づきは、能楽について何を伝えるか、その目的意識に関するもの（第4節）、このようなワークショップで日本語教師が能楽をどう伝えるか、その役割に関するもの（第5節）、日本語教師の持つ伝統文化に対する興味の重要性に関するもの（第6節）である。

## 2. 先行研究

学校教育において能楽を取り上げた事例の報告は、2017年以降、少しずつ見られるようになってきている。玉村・荻野（2017）、渡邊・飯塚（2017）、田村（2018）、深川（2019）などがそうである。

西川ほか（2017）の指摘したような「教師と教える内容との関係の問題」に目を向けた研究として、森川（2019）、森川・永須（2019）、森川（2020）がある。

森川（2019）は、日本語教師が授業で取り上げる文化について、日常生活に根ざした「“little C” culture」とそうではない文化的所産・産物である「“Big C” culture」に分かれること、能や茶道は、後者に属し、「ネイティブの日本語教師であっても」「まるで外国の文化のような距離感のある『異文化』でありうる」ことを指摘した（表3）。その上で、伝統文化の継承者を迎えて、ワークショップを実践するに際し、その管理者としての日本語教師の役割とは、彼らの伝えようとするものが間違いなく伝わるような工夫をすることだとし、ワ

ークショップの講師を担当した伝統文化の継承者、能楽師・上田宜照氏と茶道家・福田竹式氏が、その文化について伝えたいと話した内容を報告している。

表3 母語話者にとっての“Big C” culture と “little c” culture (森川 2019)

	“Big C” culture	“little c” culture
母語話者にとって	「異文化」でもありうる	自分の文化
日常生活の中に	基本的には「ない」	必ず存在する
その獲得は	必須ではない	必須
獲得する方法	趣味として、日常生活から離れた時空間の中での努力を通して獲得する	日常生活の中での経験を積み重ねていくことで獲得する
獲得したら	ある種のステータスになる	獲得して当たり前

森川・永須(2019)では、日本語教育の授業内において、“Big C” culture の体験学習を行った場合の、「伝統文化の継承者」、「日本語学習者」と「日本語教師」の関係を図1のようなイメージで把握した。その上で「教師も参加者の一人として学習者と体験を共にし」、「その場では教師は従来の『教える役割』のイメージを手放すことによって、「教師にとって『なじみが薄い』『自信がない』分野にもテーマを広げられる」ことが学習者の利点となりうると指摘した。



図1 能楽ワークショップにおける参加者の位置関係 (森川・永須 2019)

森川(2020)は、日本語母語話者、外国人を含む39名の日本語教師のうち、日本の伝統文化の体験学習活動をしたことがある教師は、29名(74.3%)であったこと、したことがない教師のうち、7名は「やりたいのに、できない」と推測される回答をしたことを報告し、「言語だけでなく、文化も教えなければならない」という考え方がすでに教師たちに共有されていると述べた上で、「『体験』から何か学ぶべき価値のあることが得られるのか。文化に関して専門家ではない日本語教師に何ができるのか」という二つの疑問に「十分に答えられる学習理論とカリキュラム開発」が課題であるとした。

以上のような先行研究を踏まえ、日本語母語話者教師が、「異文化でもありうる」能楽の2度のワークショップに図1のような立場で参加し、講師である能楽師との打ち合わせや資料作成、振り返りインタビューなどの作業を通じて、また能楽に関する自らの疑問を整理する過程において得た、大小さまざまな気づきとその過程を報告する。

### 3. 日本語教師と日本の伝統文化

表4は、ある日本語教師が、ある時点で持つ日本語教育に関する知識・経験の量、日本の伝統文化に関して持っている知識・経験の量の関係を表したものである。前掲図1に時間軸と空間軸を加えて、一人の教師が、学生とともにワークショップに関わりながら、経験値を積み、さらに横につながっていくというダイナミックな全体像をイメージするために、モデル的に作成した。

表4 ある教師の「日本語教育」「日本の伝統文化」に関する知識・経験量

		「日本の伝統文化」の知識・経験が		
		大いにある		全くない
「日本語教育」 の知識・経験が	大いにある	①	④	⑦
		②	⑤	⑧
	全くない	③	⑥	⑨

表 4①に入る教師は、日本語についても日本の伝統文化についても、知識や経験を豊富に持っており、ワークショップの管理者としては理想的な教師である。しかし、森川 (2019) が述べたように、現実には、このような教師は多くなかろう。授業に関して十分な知識と興味のある大ベテランの教師でも伝統文化には全く関心がないという状態 (表 4 中の⑦に入る) は存在し得る。「教科書を教えるだけで限界」(森川 2020) である状態の、教師歴の浅い人は⑨の状態である。時間の経過とともに、これらの教師の状態はこの表の中を移動する。⑨から⑧、⑦と移動する教師もいるし、⑨から⑤、④というふうに移動する教師もいるだろう。その動き方は人それぞれだ。

ここで、重要なことは、日本語教師である以上、日本語教育に関する知識・経験は必須だと言えるだろうが、1) 「伝統文化」に関しては必須ではない (森川 2019、表 3) だろうこと、2) 「伝統文化」の知識が全くなくても「日本の伝統文化」に関する授業やワークショップの管理や実践を任される可能性はあるということである。森川・永須 (2019) が主張したのは、伝統文化に関する知識がない⑦～⑨の教師にも、学習者とともに学ぶという姿勢で (図 1)、それを扱い、学生を利する可能性はあるということであった。一方で、森川 (2020) の示した「学習理論とカリキュラム開発」という課題に取り組んでいくには、①～⑥に入る教師が、その「伝統文化」に関する知識や自身の問題意識を深めることによって、学生に対する効果的な見せ方を工夫し、共有していく必要があるだろう。以下、第 4、5、6 節に、筆者の気づきを共有する。

#### 4. 能楽の何を伝えるか

甲南能楽 WS (2019) は、表 5 のような構成で実施した。以下、この 2 時間 30 分の中で、何をどう伝えようとしたかについて、報告する。

表5 甲南能楽WS(2019)のスケジュール

時間	内容
30分	インタビュー
30分	体験1 ① 昔の日本人の立ち方 ② 「すり足」「面」をつける体験
30分	講義 上田氏の考える「お能」について
30分	体験2 ① 本日の演目「熊坂」について② 「お話し」の発声
30分	鑑賞 「熊坂」の実演 および 質疑応答

#### 4.1 目的意識の持ち方

能楽ワークショップで、何を伝えることを目的として設定するか、という問題である。能楽ワークショップなのだから、能楽を伝えればいいのではないかと思われるかもしれないが、ことはそう単純ではない。ということが、筆者にも実践してみて初めてわかったのであり、能楽に関するワークショップの実践報告がまだ少ない現時点において、このような問題も共有する意味があると考えて、記す。

玉村・荻野（2017）は、中学校の音楽の授業で能楽「羽衣」をとりあげた例であるが、「実践校の近隣で素人弟子に謡や舞を教授する活動を行っている、地域の能の実演家」に協力を仰ぎ、「授業の指導者は音楽担当教諭であるので、指導者が中心に授業を進め」という形をとった。つまり、完全に教師が主導権を持って、「講師が授業のどの場面でもどのようなことを生徒に教えるかを決め」ることとしたのである。この場合、教師は、音楽について豊富な知識と技術を持っていて、能の実演家の方に、いわばティーチング・アシスタントの立場で関わってもらったとイメージすればよいだろう。

一方、甲南能楽WSの場合には、講師の方は、能楽を生業としてその道を歩んでいる、かつワークショップ講師の経験も多く、伝えたい内容を豊富に持っている上田氏であり、管理者を務めた筆者らとの関係性は、玉村・荻野（2017）のそれとは大きく異なる。それで、教師（管理者）は前掲図1にあるような立場で参加し、能楽についてどんな内容を盛り込むかということに関しては、講

師の上田氏に全面的に考えてもらい、教師は講師の方が生き生きと話しやすい環境を整える役割に徹する方がよいと方針を定めた。

そのような姿勢で、実際に2回のワークショップの運営に携わる中で、具体的に何を伝えるかについて、筆者の中に新しく生まれた意識がある。それは、初心者対象のワークショップの目的として「能楽を伝える」ことより「人物を伝える」ことに重きをおく方が、短時間で効果的な活動を行える可能性が高いという意識である。ワークショップに関わり始めた当初、筆者の中には、能楽のワークショップで「人物を伝える」という目標設定はほとんどなかった。筆者にとっての“Big C” culture、「能楽」というものが、長い歴史を持って日本に存在しており、その中で守られている純日本的な何か、抽象物のようなものをイメージしていて、それを伝えなければならないのだ、とそんなふうに考えていたように思う。そのような考えが、2回のワークショップを経て、変化した。その体験を以下に述べる。

2018年にワークショップの打ち合わせで、初めてお会いした時、上田氏が以下のように言ったのを覚えている。

「ワークショップでは、少しでも、私、上田宜照を知っていただきたいのです」  
(表2資料①)

この時、先述のようなイメージを持っていた筆者の中に、若干の違和感が生じた。打ち合わせのあとで、次のように分析した。上田氏は、芸能を生業に生きる人として、人気を集めなければならない宿命を負っており、それは一般の能楽の公演でも、学生が対象のワークショップでも、同じことなのだろう。しかし、教育の現場で行われる以上、教師は、中立的な立場で能楽そのものを伝える努力もしなければならない、と筆者は考えている。それが、違和感の正体であろう、と。そして、講師と教師の立場が違うのは当たり前であり、上田氏と筆者は、違う立場から、ワークショップの内容を構成していけばよいのだ、と考えた。しかし、ワークショップの打ち合わせ等で、上田氏からさまざまな話を聞く機会を得て、以下のような事実が分かってきた。



上田氏は、子供のころから、能楽にたずさわり、一般の人々の反応を見続けてきた。学校教育の中で、能楽がどう扱われているかも、ふつうの子どもといっしょの目線から体験し、ワークショップも数多く、体験してきている。その中で、能楽の本当のおもしろさが伝わっていないと、もどかしく感じることも多くあったそうである。その体験から出した結論が「私を知ってもらいたい」というものだったというわけである。上田氏のこのことばは、彼の30年近い、ぶ厚い体験に裏打ちされたもので、「能楽師という人間を伝える」ことが、最も効果的に、短時間で、強く、興味深く能楽そのものを観客に伝えられる方法なのだという、非常に本質的な提案でもあったのだ。

能楽というと、世界最古の演劇として、古くから厳格な型を守って続けている、そこに価値があるのだ、というイメージがある。だから、古いことが価値であり、長い歴史を通して守られている型というものがなんであるかを知ることが能楽を知ることだと思ひ、能楽を授業で扱うとなると、その歴史、その型を教えることこそ最優先だと自動的に考えてしまう。このような思考の癖は、筆者だけでなく、多くの人にあるのではないだろうか。しかし、上田氏の話聞くうちに、筆者の中の抽象物としての能楽のイメージが少しずつ崩れ、この現代に、我々と同時代を生きる能楽師という人々が人生をかけて守ろうとしている血の通った能楽の新しい姿が立ち現れて来た。自分の生活から、かけ離れたところに古めかしい存在としてある「伝統文化」から、自分とともに今を生きる「伝統文化」に変化したとでも言えればいいだろうか。2年にわたるワークショップとの関わりの中で、能楽を近寄りたがたいものと感じてしまっていた先入観が知らぬ間に壊れていたのである。筆者を、図1の「学習者と同一線上の目線で体験学習に参加する」教師とすれば、今回のワークショップは、参加者に、このような大きな価値観の変革をもたらしたと言える。能楽の世界に深く分け入っていくための扉を開く、重要な学びのステップになると思われる。

#### 4.2 「人物を伝える」ことの内実

能楽師の「人物を伝える」というのが具体的にどういったことであるか、甲南能楽WSの具体例を二つに分けて述べる。一つは、能楽師の方の能楽に対する

思想、姿勢に関するもの、いま一つは、能楽師の方の性格や嗜好である。前者は、上田氏が持っていた内容、後者は、筆者と共同研究者の森川が、ワークショップの打ち合わせをする中でとり着いた内容である。

能楽師、上田氏の能楽に対する思想、姿勢というのは、森川(2019)に概略がまとめられている。実際の講義で、上田氏が能の三つのポイントとして語った生のことは次のようなものであった(表1資料②より抜粋。下線は筆者)。

### ① 心の成長

・・・能というのは、650年間、ほとんど形が変わらない中で、一つ大きな芯、核というものがあると思います。それがいったい何か、と言いますと、私なりに思うのが、命を考える、命の大切さを学ぶということ、これにつけるのではないかと、思います。650年前がどういう時代だったのかと言いますと、足利義満の時代、南北朝の戦がようやく終結いたしまして、長い戦乱の時代から出て、平和の時代と謳歌できる時代です。なぜ、その時に、命とは何かということを考えさせられたのか、私なりに思いますのが、これを作った人物というのは、平和な時代に生まれて何も考えずに生きてきた人間ではありません。(中略) 命の軽かった時代に、人の命って何だろう、人ってどう生きるべきなんだろう、本当にこれがあるべき姿なんだろうか、そう思い悩み、生き抜いて来た人たちが作った、これが実は能なのだと思えます。だからこそ、それを見て、人とはなんだろう、どうあるべきなんだろう、と私たちが思い、その曲を理解し、悩み考えることで、役者も、ご覧いただく皆様方にも心の成長を促すといった、エンターテイメント性以外の真の意味での人のあり方について考えさせてくれる、芸能なんだと思っております。・・・

### ② 先人との対話

・・・私たちは私たちに、これは今の感覚ではきつこうなんだろう、もちろん、言葉は変えてはいけないし、中の意味も変えてはいけませんが、解釈というのは自在にできるもので、私なりに思うのは、おそらくは天鼓

というのは、こういうふうになってくれたのではないかと思ひながら、答えをつとめ、つとめるためにさまざまな技術を身につけ、こういったうたい、ああいったうたい、こういうふうにうたえばいいんじゃないだろうか、こういう速度で、こういうぐらいで、こういう声で歌えば、私なりにさまざまな工夫をし、皆様方、そして、先人と対話をする、私たちがその、皆様方に直接語りかけないでも、思いを発信することで、対話を試みる、これが能の大切な部分であり、それがあからこそ、心の成長につながることもあるのではないかと思っております。・・・

### ③ 伝統と伝承

・・・伝わったものを何も考えずに、そのまま承る、のが伝承。意味は考えないで、次の世代に渡す。次の世代もやはりそれを承って、次の世代に渡す、これももちろん、大切なことなのだ、と思ひますが、これは、考えることをやめてしまう危険性をはらんでいる。伝統というのは、何か。私なりに思ひますのは、伝えて続べると書きます。統治するの続ですね。伝えられたものをその芯は変えずに、今の感覚に、あるいは、伝えられたものの感覚に落とし込み、なぜこういうことを言われているのだろうか、なぜこういうふうにしなればいけないのか、なぜこうあるべきなのか、それを理解した上で、もちろんその芯は変えませんが、ほんの少し、現代に即した形に、あるいは、ほんの少し表現の技法を工夫する、こうしてその思い、芯を伝える、これこそが伝統なのだろうと思ひます。そして、能は、いわゆる伝統芸能なのだろうと思ひます。650年間、同じ形で続いてきているものではあるものの、やはりその中でさまざまな人の葛藤、あるいは考え、悩み、そういったものがあり、それぞれの人が一生懸命それを演じ、考え、自分たちの表現として、落とし込んできたものだろうと思ひます。・・・

甲南能楽WS（2018）の日本人参加者は、これらが能楽師上田氏自身の声で語られるのを聞いたわけであるが、紙面で見ただけでも、その迫力が伝わるであ

ろう。このような今を生きる能楽師の情熱が、現代の能楽を支えている力そのものなのである。そして、この能楽に関する思想、姿勢は、能楽師の方ひとりひとり違うものであって、だからこそ、ライブで、本人の声で、聞く価値が高いものである。

芸術に対する思想、姿勢が一人一人違うということは、普段から、芸術家の方々と触れ合う機会を持つ人にとっては、ごく当たり前のことかもしれない。筆者も、一般論として頭では分かっていたつもりであった。しかしながら、このような芸術家のオリジナリティを伝えることこそが、今に息づく伝統文化を伝えることになるのだという確信は、甲南能楽 WS の体験がなければ得られないものだった。

次に、「人物を伝える」ことの二つめ、能楽師の日常生活、上田氏の性格、趣味、嗜好などを伝えるということについて述べる。次のやりとりは、甲南能楽 WS (2019) の「インタビュー」の時間の1コマである。

参加者「どんな食べ物が好きですか」

上田氏「えっと私は、あの、イタリアン、パスタが非常に好きでして……」

参加者「(笑い)」

実は、この「インタビュー」コーナーは、難しい本題に入る前のウォーミングアップ的な時間、という位置付けで取り入れたものであった。参加者の中には初級の学生もいたので、彼らが少しでも参加した気持ちになれるようにという配慮からである。しかし、今になってよく考えてみると、このような他愛もないやりとりが、この能楽WSの中で、非常に大きな意味を持っていたと強く思わずにいられないのだ。まず第一に、WSから一年を経ても鮮やかに筆者の記憶の中に蘇るシーンの一つであることがそれを証明している。ほかの参加者も同様ではないだろうか。「カラオケにはよく行きますか」「どんな音楽が好きですか」等、留学生にとっては初級レベルの会話活動でおなじみの質問がそのまま使える。その答えが、能楽師、上田氏の口から伝えられると同時に、それまでの手の届かない古めかしい「能楽」のイメージが崩れ、パスタ好きでカラオケ

によく行く現代人、上田氏の支えている能楽のまったく新しいイメージが立ち現れてくるのである。それは、温かい笑いとともに、「能楽」という近寄りがたい伝統文化の実践者が、私たちと同じ現代人として生活を営む生身の人間であることを一気に理解させる瞬間であった。“Big C” culture と“little c” culture とが結びついた瞬間だったとも言えるだろう。その重要性は、ともすると看過されてしまうと思うので、特に強調して、ここに記しておきたい。

以上、能楽のワークショップで、能楽師の人物を伝えることの重要性和その方法として二つの例を述べた。これは、能楽に対して参加者が持つ先入観をとりはらうプロセスの一部に位置付けられるだろう。何を学ぶにあたっても必要なステップだと考えられるが、能楽については、その歴史の長さ、国際的知名度の高さゆえに、特に意味が大きいのではないかと思われる。

## 5. 能楽をどう伝えるのか

前節で、能楽ワークショップで伝える内容に関する筆者の気づきを述べた。ここでは、日本語教師の果たす役割、それをどう伝えるか、という点について述べる。



図2 上田宜照氏による「熊坂」の実演のようす（於：瓦照苑）

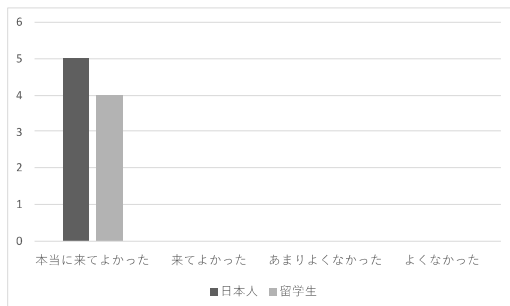


図3 「今日のワークショップはどうでしたか」に対する回答

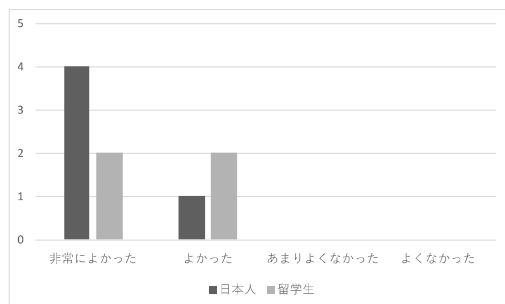


図4 「今日の日本語のサポートはどうでしたか」に対する回答

図3と図4は、甲南能楽WS(2019)実施後アンケートの結果から作成したものである<sup>1</sup>。図3はWS全体について、図4は日本語のサポートについて、尋ねたものである。WS全体に対しては、全員が最高点の評価を出している。この高評価にもっとも貢献しているのは、アンケート記入の直前に見た、上田氏のお能の舞台の実演(図2)であったと思われる。留学生たちも「初めて能をみてすごいと思った」「すごかったです」「先生のお能をまた見に行きたいです」と絶賛している。このような場合、アンケート結果は、他の点についても、上

<sup>1</sup> 日本人5名、留学生4名が協力してくださった。

振れしやすいだろうということを考え合わせて、図4の結果をみると、日本語のサポートは、まだ十分ではなく、改善すべき点があると思われる。

筆者の行なった「日本語サポート」は、以下の三つであった。

- A 事前の打ち合わせ（表1資料①）の内容から、上田氏のメッセージの構成を整理し、上田氏自身の語彙、表現を可能な限り使いながら、日本語の文構造を簡単にした原稿を作成し、上田氏にお渡しした。
- B Aをもとに、Aの原稿をより簡潔にした要約を作成し、当日の配布資料に組み入れて、印刷物として配布した。
- C Aの原稿から理解が難しいと思われるキーワードを抜き出し、画用紙に英訳と共に併記して、当日、上田氏が講義をしている最中に字幕のように掲げた。

会場が大学のような教育設備の整った場所であれば、BとCについては、機材の力を借りて、もっとスマートに行えることは間違いない。しかし、設備、機材のない場所でも工夫のしようはあるはずだ。今回の試みもその一つで、アンケートでも「単語カードを提示するのはとてもよい方法だと思った」「キーワードがあるだけで理解しやすかったと思う」「語彙カードは目と耳、両方からのインプットでとても役立った」など、概ね、高評価をいただいた。

Aについては、時間的制約が非常に大きな鍵となってくるだろう。この作業が行えなかった場合、B、Cのような「教材」を準備することも不可能である。能楽師の「人物を伝える」という目的を達成するためにも、非常に重要な作業過程である。甲南能楽WS(2018・2019)では、この作業に十分、時間をかけることができたのは幸いだった。これについては、振り返りのインタビューで、上田氏にも、以下のような評価をいただいた。

それまでは、私が一人で考えて話していたことをまとめて直してもらったのありがたかった（中略）なんどもお会いして、私の性格、考えを深く理解して、私がしゃべるであろう言葉をうまく使っているのがたいへんありがたかった（中略）留学生にうまく伝わるように、いわゆる翻訳をしていただ

いて(中略)私の言葉をより分かりやすく的確に組み立てていただいているのが、読んでてあ、なるほど、と自分の中が整理できたことが多い。それはすごくありがたかったと思います。(表2資料③より抜粋)

聞けば、上田氏は、WS後、このときの原稿をもとに話すようになったという  
ことで、次のようにも語っておられる。

私たちが日本語のプロに期待することっていったら、いわゆる言葉のプロ  
でいらっしやいますから、私たちってのは、あくまで役者なんですよ。役者  
の感覚の言葉しか選べない、と。それをそのいわゆる、外国人向け、日本人  
向け、どちらでも結構なんですけど、わかりやすいかたちに、より受ける形  
に翻訳していただける、これが私たちがまずあの日本語教師の方に、お願い  
したいことだろう、と思います。(表2資料③より抜粋)

上田氏のこの評価は、日本語教師が伝統文化実践者のメッセージをわかりや  
すい日本語に翻訳する、そのような形の貢献が大いに期待される可能性を示唆  
していると考えられる。時間さえあるのならば、作業自体は、ふだんの教材作  
成、例えば読み物のわかりにくいことばをわかりやすい形に変換することと同  
じであり、日本語教師の技術の生かせる、いわば十八番の作業だと感じた。今  
後、伝統文化を取り上げるワークショップが増え、その実践者と関わる日本語  
教師が増えていくことも予想される。現時点では、夢のような話かもしれない  
が、日本の伝統文化を世界に向けて発信するということの一端を、このような  
形で担う可能性のある立場にあることを、日本語教師は認識しているべきであ  
らうと考えた。

## 6. 能楽と、日本人の「腰と腹」について

### 6.1 日本語教師の持つ、学習者起源の興味・関心の発掘

最後に、筆者がなぜ、能楽のワークショップに参加することになったか、述



べる。その経緯は、筆者が日本語教師であることと切り離して考えることができないものである。その興味の発端は、日本語教師になりたての頃の漢字の教科書に補助教材として載っていた読み物にあった。それは、「腰と腹」と題された読み物で、次のような内容を含むものであった。

日本人の身体所作の基礎は、腹と腰にある。座る、立つ、歩く、すべてが腰と腹を中心になされる。外国人が着物を着て歩くと不自然なのは腰と腹ができていないからである。逆に、日本人がハイヒールをはいて歩く姿がさまにならないのは、ハイヒールをはいて下駄の歩き方をするからである。（新美・山浦 1984 より抜粋、要約）

筆者が教師になりたての頃（1990年代）、この読み物は何度教えても、例外なくクラス全員に受けた。どの国からの学生も、年齢も性別も関係なく、目を輝かせて、文章を読み進んだ。日本人の「腰と腹」に関する話というのは、それほど、日本語学習者にとって、興味深い、知的におもしろいものなのだということが、その読み物を読むたびに、彼らの興奮した表情とともに、筆者の中に堆積していった。その漢字教材を使用しなくなってからのちも、その興味は、筆者の中に残り、育っていった。筆者自身が長年持ち続けていた関心、能楽のワークショップに参加することを後押ししたのは、もとを正せば、かつて教えた学習者たちにもらったものだったのである<sup>2</sup>。

日本語教師の中に存在するこのような学習者起源の問題意識は、第一に、日本語教師の間で、第二に伝統文化の実践者との間で、共有する意義が大きい知的財産であると思われる。前者、日本語教師との間での共有は、普段の授業でとりあげる話題、応用読解教材探しといった作業のヒントになるし、能楽のよ

---

<sup>2</sup> ただし、この起源に気づいたのは、ワークショップを終えて、2020年にその振り返りの作業を開始したときだった。2018年のワークショップの前に、このことに気づいていれば、ワークショップの内容にもっと積極的に取り入れてもらおう働きかけができたのに、貴重な機会を失ってしまったと悔やまれた。

うな難解とされている伝統文化を扱う際の切り口として、ある程度保証された手堅い選択肢になり得る。後者、伝統文化の実践者に、この問題意識を伝えることは、彼らの国際的なマーケット・リサーチをわざわざではあるが手伝う意義を持つだろう。日本文化に興味を持ち、日本語を学びたいと考える留学生が、時に難解な伝統文化に対して、どんな切り口ならたやすく踏み込んでくれるかという点について、実体験を通じて知っているのが日本語教師なのである。

そのような考えから、筆者の持つ日本人の「腰と腹」に関する情報を、概略、述べて、共有しておきたい。

## 6.2 日本人の「腰と腹」について

前述の漢字教材の読み物「腰と腹」には、あたかも、すべての日本人がその身体知を共有しているように書かれていたのだが、正直なところ、筆者自身には、その感覚はなかった。だから、いつも「今の若い人たちの感覚は変化してきました」と言葉を添えた。いつごろから、日本人が「腰と腹」の感覚を失い始めたのだろうか。

鈴木 (2006) によると、既に 1920 年代の日本において、身体運動の実践家たちが、スウェーデン体操に代表されるような「スポーツ・体育」の影響による「腰肚文化」消失への危機感を募らせていたのだという。社会活動家の北一輝、東京女子体操音楽学校の藤村トヨ、健康法提唱者藤田靈斎、医師で子爵の後藤新平の四名の言説を具体的にとりあげた上で、彼らが「腰肚文化」を勧め、その消失に警鐘を鳴らしたのは、彼らが「肉体の健康だけではなく、意志や人格の形成、つまりは心の問題も含めて考えていた」からだと述べている (鈴木 2006)。当時は、「腰肚文化」が、日本人の精神性を支えていると考えられていたのである。しかし、少数の実践家たちの警鐘は、多くの日本人の生活の中から「腰肚文化」が消えていく流れを止めることはできなかった。

1937～1947 年に日本に滞在したドイツ人哲学者、デュルクハイム (2004) に

---

<sup>3</sup> 言語化される「知識」とは対照的に、説明はできないが実現できる (いわゆる「頭ではなく身体が知っている」) 身体の動きについての人間の「知」を指す。

よって記されたあるエピソードが、象徴的に当時の日本人の感覚を伝えてくれる。デュルクハイムは、日本人の肚に関心を持って、その情報を集めていたが、そのことを知っていたある日本人が、多くの人の集まる宴席で、以下のように話したという。

いいですか、ここに居合わすヨーロッパ人は、もし後ろから押されるとすぐ転ぶ姿勢をしています。日本人の中には、押してもバランスを崩す人はいないでしょう。（デュルクハイム 2004）

今から 80 年前、多くの日本人は押してもバランスを崩さない立ち方をしており、そればかりでなく、それを一目瞭然に見分ける目を持っていたというのである。このような目<sup>4</sup>をまったく持たない筆者にとっては、衝撃的な記述であった。

斎藤（2000）は、日本人の伝統的な身体文化を「腰肚文化」と呼び、それは「文化によって身につけられる身体感覚である」とした。斎藤（2000）は、身体文化を失ったことで、精神文化をも失いつつあるという危機感を持ち、「『腰を据える』や『肚を決める』」というような「<中心感覚>がうしなわれている」のではないかと指摘、その回復のために「身体感覚の技化<sup>5</sup>」が必要であるとし、丹田呼吸法、歌舞伎の六方、能のすり足など東洋のさまざまな身体技法を取り入れた「身体文化カリキュラム」を提案している。

安田（2011）、安田（2018）は、能楽師でもある著者による、呼吸法や身体作法のガイドであり、斎藤（2000）と同様、伝統的な和の作法が、現代人の肉体的、精神的な問題を改善するという考えに基づき、独自のエクササイズを提案している。また、「肚が据わる」など現代人にはわかりにくい感覚について、

---

<sup>4</sup> このことを武道をたしなむ数人の知人に尋ねてみたところ、彼らは動いている人間の重心のありかが分かるそうである。

<sup>5</sup> 「技化」は「わざか」と読む。

アメリカ発祥のボディワーク、ロルフイング<sup>6</sup>の用語を援用するなどして、能の実践者の視点から解説を加えてくれており、たとえば欧米人に、その感覚を言語化して説明しようとした場合にたいへん参考になる。

以上のような予備知識を持たずに、初めて聞いた人にはおそらく全く理解できないと思われる、上田氏のことばを紹介したい。それは、以下のようなものである。

能ってのが立ってるだけじゃん、と言われることがある。立ってるだけの場合もあるんですけど、どれだけ、その、空気を止めたまま立つってのが大変なのかっていうようなことっていうのはなかなか、やってみないと分からないっていうのがありますね。よく私が言うのは、「空気を止める」「空間を充実させる」ということです。(上田氏、表2資料①)

上田氏の言う充実した空間、能の舞台のはりつめた空気が、舞台に携わる方々の身体、その中心である腰と腹に支えられていることは疑う余地がない。しかし、そのことが言語化されることはめったにないので、特に初心者には伝わらないことが多い。甲南能楽WS (2018・2019) では、「すり足」を体験する時間を設けてあったが、参加者はみな、どうすれば上田氏の真似ができるのか、首をひねって、苦勞なさっていた。上田氏によれば、あまりにも当たり前の身体知であって、「なぜできないのが分からない」(上田氏、表2資料③) ことなのだそうである。その感覚に素人は驚愕する。つまり、幼い頃からすり足を習い覚えてきた能楽師の皆さんにとって、このような基本動作は、説明はできないができてしまう母語のようなもの、いわゆる身体知だということだろう。この事実が紹介されるだけでも、その訓練のない現代人が、能楽師のように「立つ」「歩く」ことの難しさと、その背景に受け継がれてきた日本人の身体知の存在をすかし見ることができる。ひいては、能が守り抜いている「型」の価値を改

---

<sup>6</sup> 米国 Rolf Institute による身体を統合するボディワークで、安田氏は公認ロルファーの資格を持つ、とある。

めてとらえなおすきっかけにもなるはずである。

このような思考の過程を経て、筆者は、かつての学生の喜ぶ顔を思い浮かべながら、たとえば、能楽ワークショップの前に、日本人の伝統的な身体作法を学ぶ機会を設けてみるのはどうだろうかと考えるようになった。教師が武道の心得のある方なら、比較的容易に「見せる」ことが可能だろう。学生の中に、空手や柔道を習っている人がいれば、なお盛り上がるだろう。

身体知だけではない。例えば、装束、楽器、面の表情、物語、音楽などをテーマにしても、参加者の目を開く、具体的で実践的な入り口は、作り得る。そのような視点にたつて、自由な発想で、いまいちど、能楽（あるいは他の伝統文化）を見てみるならば、学習者がこうすれば惹きつけられるだろうというアイデアを、筆者同様、教室での体験から得ている日本語教師の方も多いのではないか。そのアイデアは、日本語教師でなければ思いつかない、大きな可能性を秘めたアイデアであるかもしれない。見過ごさず、意識化して、共有し、育てていくべきものだという認識の重要性を強調しておきたい。

## 7. まとめ

本稿は、留学生と日本語教師を対象とした甲南能楽WS（2018・2019）に管理者として携わる機会を得た、筆者による気づきの報告である。その気づきは、大きく次の3点であった。

- 1) 先入観にとらわれず、ワークショップの持つライブ感を大切に、能楽にたずさわる実践者の能に対する思想や姿勢、また、ふだんの性格、嗜好などを多く伝えようという目的意識を持つことで、現代に息づく能楽をより効果的に印象強く伝えられる可能性がある。
- 2) 講師の伝えたいメッセージを、学習者に伝える工夫が必要である。1)の目的のためにも、講師のメッセージを整理し、わかりやすい日本語に「翻訳」する作業が、日本語教師の役割として、重要である。
- 3) 日本語教師は、学習者と共有可能な「伝統文化」の見方、切り取り方を

普段の授業の中で、日常的に、発見し得る存在である。そのことを理解して、そのアイデアを見過ごさず、育てていくという認識が必要である。

ここで、先行研究、森川 (2020) が掲げた課題に立ち戻ってみる。森川 (2020) の課題は、『体験』から何か学ぶべき価値のあることが得られるのか。文化に関して専門家ではない日本語教師に何ができるのか」という二つの疑問に「十分に答えられる学習理論とカリキュラム開発」を模索するということであった。1) は、ワークショップの参加者が能楽という伝統の世界と自らの関係を再構築する方法に関する気づきであり、「価値ある学び」のためのカリキュラムにつながる試案の一つである。2) はワークショップの場において、3) はもっと大きい視野で、「日本語教師に何ができるのか」に関する気づきである。決して大きな一歩ではないが、模索の中の確かな一歩ではあると思う。

これらの気づきは、日本語教師が、教室で日本語を教えて得る経験値と同様、ワークショップを実践した者が得る経験値に含まれるものだ。ただ、プロの能楽師の話を実際に伺いながら、能楽のワークショップの経験値を積める日本語教師は、ごく限られているという認識から、事例として報告する意義が大きいとも考えた。今後、能楽をとりあげたワークショップの開催を検討する方々のイメージを広げる一助となれらう嬉しい。

## 付記

本研究は甲南大学総合研究所総研チーム No. 143 (研究代表者トーマス・マック) として研究助成金の支援を受け、行われた。

## 謝辞

ワークショップの準備段階から執筆の過程において、筆者の発し続ける面倒な、時に不躰な質問に対し、快く誠実に答えてくださった上田宜照氏に、心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

## 参考文献

- 斎藤孝(2000)『身体感覚を取り戻す 腰・ハラ文化の再生』NHK ブックス
- 鈴木明哲(2006)『『腰肚文化』の消失—1920年代の言説から—』スポーツ史研究第19号 pp.19-28
- 玉村恭・荻野美智江(2017)「授業で能をどう扱うか—中学校での《羽衣》の授業実践から—」上越教育大学研究紀要第36巻第2号 pp.643-656
- 田村にしき(2018)「能の学習プログラムの開発及び実践：一宮城県大崎市大貫地区に伝わる『春藤流』の謡を核として—」音楽教育学47(2) pp.1-12
- デュルクハイム, カールフリート(2003)『肚-人間の重心』下程勇吉監修 落合亮一・奥野保明・石村喬訳 麗澤大学出版会 (デュルクハイムによる執筆年は不明であるが1960年代と推測されると解説にある。)
- 新美和昭・山浦洋一(1984)『a Gateway to the Japanese Written World』Japanese Language Institute 上智大学
- 西林克彦・宮崎清孝・工藤与志文(2017)「教育に心理学はどこまで迫れるか」The Annual Report of Educational Psychology in Japan Vol.56 pp.202-213
- 深川美帆(2019)『『能楽』をテーマとした体験型日本文化学習のコースデザインと授業実践』第5回スペイン日本語教師会シンポジウム発表論文集 pp.35-36
- 森川結花(2019)「日本語教育における伝統文化をテーマとした異文化理解プログラム開発の可能性」甲南大学教育学習支援センター紀要4号 pp.53-64
- 森川結花・永須実香(2019)「日本の伝統文化体験から得られる学習者の気づきと教師の役割」CAJLE2019 Proceedings
- 森川結花(2020)「日本文化体験学習にかかわる教師の認識」甲南大学教育学習支援センター紀要5 pp.37-51
- 安田登(2011)『疲れない体をつくる「和」の身体作法』祥伝社
- 安田登(2018)『能に学ぶ「和」の呼吸法』祥伝社
- 渡邊康・飯塚恵理人(2017)「能楽囃子の義務教育課程音楽課程の単元化のための教材試作：『道成寺物着』をモデルとして」 椋山女学園大学教育学部紀

要 10 卷 pp. 245-249